

## 沙石集の長享古寫本について

穎 原 退 藏

沙石集は江戸時代に入つてから、數次剽刷に附せられて、かなり汎く世に流布された。その最も古く出版されたのは、卷末に

慶長十乙巳年仲春下浣八日

圓智校讎

とある片假字交り古活字本で、即ち京都要法寺の僧圓智が校訂して梓行したものである。但し私はまだその原本に接した事がないので、所謂慶長版については實際に知る所がない。しかしこの書は元和二年同じく片假字活字版で再版された。即ち卷末に

元和二年六月吉日

圓智校讎

と記されたものがこれである。而してこの元和版は、慶長版と内容は全く同一であるといふ。ついでこの古活字本によつて

慶安五壬辰初夏吉日

中野氏は誰新刊行

と奥書した平假字整版本、及び

正保四曆仲冬吉日 室町通鯉山町

小島彌左衛門<sup>開</sup>之

と記した片假字整版本とが刊行された。この片假字整版本は、更にそのまゝ一丁の行敷をかへたぐらゐで、貞享三年に出版された。即ち奥に  
貞享三丙寅年閏三月上旬

とあるのがこれで、今日刊本中最も汎く知られて居るものである。又元祿年間に至つて平假字整版で出版されたものもあるが——今この書が座右にないので、刊年發行書肆名等を明記する事が出来ない——内容は特に異なる所がない。

以上あげただけでもすでに六種の版本が存して居る。しかも是等の諸本は、慶長版以來すべて同一系統に屬するもので、字句の末に纔かに二三の異同を見る外、全く同一内容のものであ

図版Web非公開

図版Web非公開

る。而してその基く所は、卷末に

此集行于世尙矣。本有廣略、條有前後、不知孰是也。頃幸得無住師之直筆正本、今也不堪蘊藏、於焉遂鏤于梓。十目所視豈其掄乎。勿敢疑也。(元和版に據る。他本にも同じく記してある。)

とある通り、著書無住の自筆本に據つたといふのであるから、傳來最も正しいわけで、慶安以後の諸本がすべてこれに従つたのも尤もである。随つて版本としては、遂に異本といふべきものを見ずして終つたのであつた。しかし圓智が校讎した當時、すでに數種の異本が行はれてゐた事は、右の識語によつて明かである。よしそれらが圓智の得た無住自筆本に比して、誤脱の多いものであつたにせよ、是等の異本を對照する事によつて、何故に廣略前後の別が生じたか、又無住が弘安六年一日稿成つて後、更に書き加へた部分がどの位あるか等、少くとも著者の撰述の過程や態度などについて、多少の考察が試みられるであらう。況んやその自筆本に従つたといふ活字本にすら、明かに誤脱と思はれる所も少くないのである。徹底的に沙石集を研究しようとするもの、殊に國語學的立場から語彙語法等を調べようとするものなどについては、是非とも古寫本を求めて、これを流布本と比較考察すべき必要がある。物語・草子・日記・歌集等、純文學に屬すべき古典については、これまで學者も古寫本の探討に頗る力を盡して來た。しかしそれも多く平安朝以前のものに限られ、鎌倉時代以後のものについては、二三の軍記物等を除く外、あまりさうした方面の研究は顧みられて

図版Web非公開

図版Web非公開

居ない。特に沙石集や發心集・撰集抄・寶物集・十訓抄・宇治拾遺物語等の所謂佛敎文學・説話文學に屬するものについては、古寫本の蒐集比較等の事業は、まだ全く試みられてゐないと言つてよい状態である。書史學的研究を特色としてゐる野村八良氏の『鎌倉時代文學新論』について見ても、沙石集の古寫本としては、内閣文庫に藏する天文年間の寫本を、珍書として擧げてあるにとゞまつて居る。然るに京都帝國大學圖書館には、天文よりずつと以前の長享三年（西紀一四八九）に書寫した一異本を藏してゐる。これは流布本と順序は殆んど同一であるが、語句には異同が頗る多く、流布本の誤を正し得べき點も少くないので、こゝに

その古寫本を紹介したいと思ふ。

この長享古寫本は、高野山の僧快秀が金剛峯寺五室菩提院の學窓で、長享三月七月中旬卷十から寫し始め、同年八月十七日に卷一まで寫しをへたものである。今まづ各卷の奥にある識語を、卷十から順にあげて見よう。

(第十)

寫本云明德二年十二月十日 於石住寺書寫之 康實

雖爲惡筆彼ノ無住之心此ノ有執之身ニ露斗リアラマホシク覺ヘ侍ルマ、寫置之畢愚僧之意願此ノ本作者之心中ニ相ヒ同シ忝ッ上智ノ古德ニ下愚ノ今身ノ廻向之心等シト云ル雖モ有ト恐レ三密平等之義諸佛猶テ衆生ニ同也況ヤ人倫チヤ一心不生ナレバ何ッ古今ノ隔ア有レ三世之分別ハ夢中ノ權現也實ニハ一念ニ久遠劫在之乎

於高野山五室菴上間學窓書寫畢

長享三歷巳西七月中旬 快秀

即ちこの識語によれば、この書はもと明德二年(西紀一三九一)康實といふ人が、石住寺で書寫した本に據つた事が知られる。次に

(第九)

於高野山五室菴院書寫畢是偏化他轉迷開悟之意趣也後見人々可□御廻向也

長享三年巳酉七月中澣八日

快秀

(第八)

長享三年七月廿三日 書畢

快秀

第七卷は惜しい事に缺本である。

(第六)

長享三年巳酉七月廿九日 書畢

快秀

於高野山五室菴院上間學窓寫之

(第五)

長享三年八月上澣七日 書畢

於高野山五室菴院上間學窓寫畢

第四卷は最後の紙が缺損して居るため、奥書を知る事が出来ない。第三卷には全く奥書がない。

(第二)

於高野山五室菴院上間學窓書寫畢併自他出迷本誓也名利思不可有者也

長享三年巳酉八月十五日

快秀

(第一)

於高野山金剛峯寺五室菩提院上間學窓寫畢是努名聞利養意樂アラス余愚盲短才而一分之無覺□  
候間自然分之出迷之便伺筆墨染畢

長享三歷己酉八月中泮七日

沙門 快 秀

以上の識語によつて、この寫本の來由は自ら明かであらう。業を始めて以來、恰度一ヶ月で功を竣へて居り、中には一卷を僅か二日間で寫したのもあるくらゐだから、勿論脱漏誤寫も少くない。流布本に比して決して善本とは言へないが、しかも前に述べた通り、流布本の誤を正し、若くは疑義を解くべきたよりのなる點もまた頗る多い。例へば流布本卷二「依藥師觀音利益命全事」の中に「さて亂橋みだれはしといふ橋の本に、年來の知音行とあひて」とある所は、この古寫本では「さて見たれば下馬の橋と云ふ云々」となつてゐる。これは明かに流布本の方が、「見たれ」を「亂」と匆卒に書きとつたのである。同じく「地藏菩薩種々利益事」の條、流布本「汝を養ひし故にかの報を得たり」が長享古寫本では「汝をいとほしかなしと思ひて養ひし故に云々」とある。これも正しく流布本の脱漏である。同卷「佛法之結縁不空事」の條、流布本「經陀羅尼の聲を聞きし故に牛に生る」の前に古寫本には更に「舍利讚歎の聲を聞きし故に、死して後に天王寺の犬に生れて、常に」の數句がある。これもまた決して快秀が勝手に附け加へた文句とは思はれない。又古寫本には同じ條の「ある女

人たはぶれに袈裟をかけし云々」とある。「ある女人」に、「花色比丘尼なり」と傍註を施したりしてある。一寸卷二だけについて比較して見ても、かくの如くこの古寫本を以て流布本の誤脱を正したり、もしくは註釋に資すべき點が少くない。特に卷九上の始めの部分の如きは、流布本との異同が頗る多く、例へば最初の「淨土房之遁世事」の條だけで二三比べて見ると、

一向往生極樂の行業の外他事なくて、往生の大事遂げたりといへり。是ほどの遁世は難くとも志しまことあらば、身は家を出でず形は世に交るども、まめやかの信心ありて穢土を厭ふ心深く、淨土を願ふ思ひ切ならば、往生の頼み疑ひあるべからず。末代は眞實の道心ある人は少く、教門を學びながら佛の教へに背くのみ多し。世間に朝夕しなれたる事だにも、心疎略にしては不覺もあやまりもあり。(流布本)

一向往生極樂の行業の外無<sup>二</sup>他事<sup>一</sup>、坐禪談義の外は世事を交へざりけり。堂の前の池に蓮華生じ、餘念起るとて掘り捨てたりと傳へたり。今の人は世事を厭はずして、専ら念佛の行立ちがたく見わたり。彼の行儀までこそ難からめ、身は家に有りとも心を專にして、念佛坐禪をも行し、形は世にまがふども夢幻泡沫のあだなる事を思ひ捨て、隨分に實と有らば往生の素懷をも遂げぬべし。淨土の法門は才覺多からず、只厭離穢土の心欣求淨土の志誠有て、念々相續して行する外の要なし。世間に朝夕しなれたる事だにも心疎略にしては不覺も誤りもあり。(古寫本)

病死憂患種々の苦にあへ共、猶恐るゝ心なく厭ふ思なし。世路にたしなみわしれども、身ゆたかに心安き事なし。かゝらんに付ては菩提心を發し、往生の行をつとむべし。稀に受けたる人身にて、急いで淨土へ生じ、有縁無縁を導かんとこそ思ふべきに、流轉生死の業因は、作せどもくゝあきたらず、淨土菩提の妙業は、教ふれどもくゝ思ひも入れず。生を受くる事は心の愛著する所、業のひくにまかせてその報いを受く。然れば當來の生所は今生の心に好みてなす業因果報にあらはる。三毒五欲の惡業を好むは、三惡四趣の惡道を願ふになる。(流布本)

病死憂患種々の苦有れども猶厭ふ事なし。受樂の爲めに淨土を願ふ人猶少し。度衆生の心彌々希也。易往無人と釋し給へる實なる哉や。當來の生所は今生の心に思染め身口に成す所の藥也。因顯れて其の報を受くる也。譬へば形ゆがめば影斜なり、音濁れば響喧すしきが如し。形と音とは因の如し、影と響とは果の如し。これ少しもたがはぬ事也。然れば三毒五欲の惡業を好むは、三惡四趣の惡道を願ふる成る。(古寫本)

以下すつと右のやうな程度で、二者の間に甚しい相違が見られる。これは決して書寫した快秀の任意な改刪とは見られないので、どうしても無住自身が、かうした二種の稿本を作つてあつたものと思はれない。即ちいづれも無住の文章と信すべきものである。それから流布本卷五の終にある「人之感有歌」及び「連歌事」の二條は、古寫本には全くない。これはすでに流布本にも「寫人任心可

有取捨」ごあるのだから、恐く快秀若くは康實が故意に省いたのであらうが、かの「本有廣略」といつたのなどは、かうした理由から、比較的佛敎に關係の少い部分が省かれて、略本的一種が生じたのであつたらうと思はれる。

かうして種々の方面から、流布本と古寫本とを比較考察して見たら、なほ得る所が頗る多からう。それはひとりこの沙石集のみでない。前にも述べた如く、他の佛敎文學・説話文學等についても、今少し古寫本の探討考究が試みられねばならぬ。その方面の研究から、學界に新しい貢獻をし得る事も、決して少くないであらう。沙石集の長享古寫本を紹介するついでに、些か思ふ所を附言して筆を闋く。(昭和三年四月)